〈書　評〉

相原博著

『カントと啓蒙のプロジェクト』

（法政大学出版局、2017年）

山蔦　真之

本書の特色は何と言っても、冒頭に著者自身が記しているように、「ハルムート・ベーメとゲルノート・ベーメによるカント批判および啓蒙批判に反論する」(1)[1]ことを作品全体の目的とした点にあるだろう。『理性の他者 *Das Andere der Vernunft*』(1985)を始めとするベーメ兄弟の著作における『判断力批判』解釈を取り上げ、そこに著者の見解、多くの場合は反論を加えることが本書のメインテーマとなっている[2]。本書の基本的な論述の流れは、ベーメ兄弟によるカント解釈(多くの場合はカント批判)を示した上で、それに対する反論を『判断力批判』のテクスト解釈から試みる、というものである。反論の対象とされるベーメのカント解釈を章ごとに示すと――

一章：判断力は「自然支配の能力」である。

二章：趣味判断は「自然からの疎外」をもたらす。

三章：崇高論もまた「自然支配の計画」に属している。

四章：目的論は「生ける自然」の可能性を認めていない。

著者はこういった、必ずしもカントに対して好意的ではないベーメ兄弟のカント理解に対して、一つ一つ丁寧な反論を試みる。その具体的な内容は、それこそが本書の醍醐味であるゆえに各々の読者が直接当たられることを期待したいが、結論だけを簡潔に叙述する。

一章では、判断力を「自然支配の能力」と捉えるベーメの見解に対して、著者はベーメが規定的判断力のみに着目し、反省的判断力の本質を見誤ったと批判する。反省的判断力は「自然を未規定のまま多様な理念に関係づけるかぎり、悟性の支配から自然を解放する能力に他ならない」(51)のであって、それは感性的な自然を「支配」するのではなく、超感性的な理念とのつながりにおいてそれを「理解」しようとする。このような反省的判断力の機能に対し著者は「自然の解釈学」という名前を与えている。二章では、趣味判断が人間を自然から「疎外」するという見解に対し、趣味判断は自然から距離をとり「疎外」された人間の認識だけではなく、「自然美の解釈学」の機能によって理論理性と実践理性を媒介することができると論じられる。三章では崇高の概念について、崇高もまた、自然の支配を目指すものではなく、「総括できない自然を理念の「否定的描出」として理解する、「崇高な自然の解釈学」を意味する」(136)ことを著者は主張する。四章ではカントが「生きた自然」の存在を認めていないという批判に対し、カントの自然目的論は反省的判断力の「自己自律」に基づいて、自然の「自立性」を認める理論」(179)であり、かつ、「有機的自然の解釈学」として自然概念から自由概念への移行を可能にしていると論じられる。

著者によるベーメに対する反論は、堅実なテクスト解釈と幅広い研究史への目配りの上になさ

1　以下、相原博『カントと啓蒙のプロジェクト』からの引用は()内にページ数を記すことによって行う。

2　本巻収録のG・ベーメ『新しい視点から見たカント『判断力批判』』(河村克俊監訳　二〇一八)の書評も参照されたい

れており、説得的なものであると評者には思える。上記の結論だけを読んでも、多くの研究者はベーメより著者の解釈を妥当なものだと考えるのではないだろうか。――しかし、評者がなお問題であると思うのは、このような反論がベーメのカント解釈に対してどこまで有効であるのか、誤解を恐れずに言えば、そのような反論に意味があるのか、という点である。正しいカント解釈を競い合うためにベーメ兄弟をとりあげたことはそもそも正当であったのか。ベーメはそもそも、カントのテクストを正しく解釈することを目指していたのか。この点が問われなければならないように評者には思われるのである。

ベーメ兄弟のカント解釈に戻ろう。判断力が「自然支配」の能力であり、その結果われわれは自然から「疎外」され、「生きた」自然を理解することができない。このようなカント解釈を聞いたとき我々は、アドルノ / ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』を想起するだろう。この連想は間違ったものではない。本書でもベーメ兄弟のいわば主著として扱われている作品『理性の他者』では冒頭から、そのカント解釈や「啓蒙」についての理解がアドルノ / ホルクハイマーの著作に多くを負っていることが明言されている。あるいは、G・ベーメは一つのインタビューにおいて、自分とハーバマスらフランクフルト学派の違いについてこのように言っている。「彼らとの違いは一つの点において明確です。新しいフランクフルト学派、ハーバマスとは違い、私は啓蒙の弁証法に固くとどまっています。新しいフランクフルト学派においてホルクハイマーとアドルノによる『啓蒙の弁証法』は脇へ置かれ、乗り越えられたとされていますが、私は『啓蒙の弁証法』には何か、啓蒙において非常に本質的なものがあると考えています」[3]。

こういった事態を考えた時、評者にはベーメ兄弟によるカント解釈は、必ずしもカントのテクストに忠実なものではなく、それどころか、最初から忠実であろうという意図をもってなされたものでもないようにすら思えるのである。それはむしろ『啓蒙の弁証法』の近代哲学批判を引き継ぎ、カントを曲解するとまでは言えないにせよ、しかし意図的にテクストの読み替えを行うことによって、啓蒙哲学の孕む問題点を浮き上がらせようとしているのではないか。そうであるのなら、カントのテクストに忠実な解釈のみでは、ベーメ兄弟に対する反論としては不十分ではないだろうか。求められることは、ベーメのカントに対する思想的な批判に向き合うことではないだろうか。

評者のこのような疑問に対して答えが与えられるのが、書下ろしとして準備され、本書のタイトルでもある「啓蒙のプロジェクト」の名を章題に持った第五章である。そこで論者は、『判断力批判』のテクスト解釈に限定されない広い視野において、ベーメ兄弟、とりわけG・ベーメのカント批判、および啓蒙批判と向き合っている。著作『理性の他者』以降もベーメは啓蒙批判を継続しており、90年代に至ってそれは「自然の批判理論」という形に結実する。「自然の批判理論」とは、人間が自然を理性によっては把握しきれない「理性の他者」として認める理論とされる。自らに対する外的な自然（環境・生活空間）や内的自然（身体）を、理性や啓蒙の支配の下におくのではなく、人間自身を自然の一部として理解すること――、これがベーメの提示した啓蒙に対するオルタナティブであった。

ベーメの啓蒙批判および「自然の批判理論」に対し著者は、「ベーメは啓蒙を誤解しており、そ

3　Böhme, G., Legewie, H., & Seel, H.-J.. Im Gespräch: Gernot Böhme mit Heiner Legewie und Hans-Jürgen Seel, in; *Journal für Psychologie*, 1(4), 34-43, 1993. p. 38, 9.

のため行き過ぎた修正を要求している」(215)と反論する。理性を「支配」の能力としてのみ捉えることは、理性や啓蒙に対する一面的な理解でしかない。この啓蒙理解はまた、ベーメが反省的判断力を見過ごしたことにも起因する。「もしも理性批判の動機として「支配欲求」だけを認めるならば、反省的判断力に固有の解釈学的含意がまさに否定されるからである」(216)。そして著者はベーメによる「自然の批判理論」の代替物として、反省的判断力に基づいた自らの「自然の解釈学」を提示する。「自然の解釈学」は、カントの反省的判断力に基づいた自然解釈、および政治的合意の理論として、一人一人の人間の考える「自然や文化の多様性」(220)と「「よき生」にかんする多様な構想」(221)を認めることができる。――このように著者は、ベーメに対する自らの思想的な反論を提出する。

反省的判断力に「よき生」の希望を託す著者の立場は、今日のいくつかの思想的な潮流と一致するように思える。それは、一元的な真理を放棄し美的多様性に哲学の可能性を模索した、本書でも折に触れ言及されるポストモダニズムの立場にも近いように思えるし、判断力を政治的判断力の能力に読み替えたハンナ・アレントのカント解釈にも通ずるところがあるだろう。とはいえ、そのカント解釈がどこまで妥当なものであるのか、さらには、そういった今日もまだ影響力の強い思想的立場の有効性もまた、問われなければならないだろう。著者は反省的判断力が「よき生」「人間の価値ある生」をもたらすことを主張するが、「善き生」のためには純粋実践理性による規定的な道徳法則が欠かせないこと、道徳性なしにはあらゆる価値は失われてしまうことこそが、カントの主張ではなかったか。なるほど、実践理性が時に暴力的なものへと転化し、正義の名のもとに人々の「よき生」を破壊することを、我々はカント以降の歴史的な事実と哲学史の展開から知っている。しかしだからこそ、「善き生」の探求においては、理性の暴力性を意識しつつ、理性との緊張関係になくてはならないことこそ、アドルノ / ホルクハイマーらの、そしておそらくはベーメによる批判理論の要点ではないのか。理性の暴力性にひるみ、「多様性を認める」「反省的判断力」へと逃避することは、今日の思想的・政治的状況において問題視されるべきであり、まさにそれゆえにこそ、あらためてカントが読まれるべきなのではないか。――評者のこのような疑問は本書においては応えられることはなかった。しかし、反論の余地のない断定ではなく、さらなる思考の呼び水となることが優れた研究の条件であるのなら、本書は間違いなくその基準を満たしている。本書の成功を喜ぶとともに、今後の論者の研究のさらなる進展に期待するところである。